

令和6年度 第1回三島市文化振興審議会 会議録

1 開催日時

令和6年8月28日（水）午後1時30分～午後3時25分

2 開催場所

三島市役所本館 3階 第1会議室

3 出席者

(1) 委員…9人／12人中

平野雅彦委員、坪井則子委員、岩下晶子委員、橋本由紀子委員、坂田芳乃委員、
籾山好実委員、井島真知委員、杉山朋子委員、山形真由美委員

（欠席：宮西達也委員、入野康孝委員、鈴木亜紀子委員）

(2) 事務局…4名

水口産業文化部長、加藤文化のまちづくり課長、江間課長補佐、鈴木副主任

4 会議の公開・非公開 公開

5 傍聴人の人数 0人

【議事録要旨】

1 水口産業文化部長挨拶

2 議事

—これより会長による議事進行—

議事に入る前に会長より、

新聞記事で、ちょっと気になった記事があるので、共有をさせていただきたい。

8月27日の朝日新聞で、身近な伝統工芸存続の危機という記事が載っていた。この記事では福岡県の伝統工芸を中心に、全国の調査をしているが、その数字を改めて見て驚いたので、共有しておきたい。記事によると、伝統工芸品の生産額は、ピーク時の1983年度は約5,400億円。2017年度には約927億円と8割減った。従事者数も、約24万2,000人から約5万8,000人と大幅に減少している。これだけ伝統工芸には人材がいなくなっていて、一方で、若い人たちが工芸だったり、いわゆる民芸だったり、そういうものを生活の中に取り入れたりしている風景を見ると、少し安心していた側面があったが、金沢のような大きな震災があったりすると、一気に立ち上がれないぐらい衝撃を受けてしまい、立ち上がるのが大変な状況にあるとのことだった。記事では、1人の方が口伝で技術を伝承してき

たものを、ネットやAIを使いながらマニュアル化していきたいと言っている。伝統工芸のマニュアル化というのが、どのようなものなのか、いまいちイメージできない部分もない訳ではないが、多様な手法が生まれて、時代にうまく伝わっていけばいいなという気がしている。もう1つだけ。同じ朝日で、いつも題字下に、「折々のことば」という小さな枠がある。これは哲学者の鷺田清一さんが、本や新聞、演劇、あるいは対談など、いろいろなものの中からワンフレーズ抜き出してきて、それについて鷺田さんなりの解釈をしているもので、今回は、岩手県の紫波町の図書館司書、手塚さんという人の言葉を紹介している。どういうものを鷺田さんが拾ったかっていうと、「町の人との雑談が多い図書館だ」ということをフレーズとして拾っている。「岩手県の紫波町の図書館の司書は、町の人から質問を受け、また雑談する中で、それがまち全体の課題かもしれないと思ったら、それを膨らませていくのが仕事だと思う。まだもやもやしている段階から関与したいから、まずは自分で調べ、いろんな人と課題を共有すべく、外へも出ていく」という短い文章が、鷺田さんの言葉を添えて書かれている。考え方によっては深い意味がこの一文から読み取れるのではないかと思う。なかなか今は、忙しい中で、雑談する余裕もなかったりするが、むしろそういうものの中に、本音があるいは大きな町の課題が含まれたりしているのではないかという気がする。もともと雑談というのは、「ぞうだん」という読み方をしていたと思うが、確か鎌倉時代の仏教の説話集に雑談集ってというのがあって、その中にいろいろな教えがある。「ぞつだん」、「ぞうだん」、何かそういうものを大事にしなければいけない時代に来ているということ、この一文から考えた。

- (1) 三島市文化振興基本計画の進捗状況について
- (2) 令和5年度文化振興事業について
- (3) 令和6年度文化振興事業について

資料(1～15 ページ)に基づき事務局から説明があった後、次のような意見交換及び質疑応答がされた。

委員：数値目標の2の「日常生活の中で文化が必要だと考える人」の率は90%くらいなのに対し、「三島の文化的環境に満足している人」の率は50%をちょっと割っている。多分分析ができていないと思うが、市民が三島の文化的環境のどのようなところに満足していないのか、課の中で何か検討ができていないのか。

事務局：こちらは市民意識調査の項目で、資料では省かれているが、本来は、「三

島の文化的環境（鑑賞機会、創作・参加機会、文化財や伝統的街並みの保存・整備など）」となっていて、文化財課が絡んでくる部分もあり、ちょっと当課だけではなかなか到達できない数字。この数字を上げるためには、文化財課と連携を取っていく必要がある。もう1つ、市民意識調査の方で文化的なことを聞いているが、回答項目は「満足」、「まあまあ」、「不満」、「分からない」ということになるが、「分からない」という無関心層はどうしてもいて、いろいろな項目に対して、「分からない」という回答が多い。文化的な部分についても、4割ぐらいが無関心層というか、「分からない」という方がいるので、その辺の人たちをどう掘り起こしていくかというか、満足でも不満でも何か関心を持ってもらうところが大事だと思っているので、その部分については、次期計画に反映できるように考えていきたい。また、市民意識調査には自由意見欄があり、教育、文化に関するご意見を20何件か貰っている。直接、文化に関係するところでいうと、佐野美術館の無料券のこととか、あと、一般的に三島には歴史・文化があるのもっと外にPRしてとか、三島市民文化会館に駐車場がないとか、どうしようもないところもあるが、いろいろと考えていきたいと思う。

委員：総合計画と文化振興基本計画が令和7年度までで、その後、10年間の大きな事業を作っていくには、三島の文化に満足していない理由の分析をして、そこにどう働きかけるかが、きっと大切になると思う。事務局も言ったように、関心のない人がかなり多いので、それを掘り起こすのが課題。

委員：先ほど、佐野美術館の無料券の話が出たが。

事務局：市民意識調査の自由意見欄はホームページに載っているが、「佐野美術館をよく利用しているが、最近、受付で各家庭に配られている無料券を他市の方が利用しているのではないかと確認しているが、それは必要なのか。配られた家庭で必要ないと思い、行きたい方にお譲りしている方も多く、多くの方が来た方が豊かな気がするので、とても残念で、嫌な気分になる」というご意見。

こちら佐野美術館に迷惑をかけてしまっているが、実は広報みしまの月1日号に楽寿園と佐野美術館の無料招待券を4枚ずつ付けて、三島市民限定と謳って配布している。ところが数年前に、それが大量にオークションに売られてしまったことがあったので、対策として、広報の配布については1家庭1冊だということを、厳密にさせてもらっているが、今年も残念ながら、オークションに売られてしまっている。三島市としては、佐野美術館に共催負担金を出しているのは、三島市民に芸術鑑賞に触れる場を提

供するためで、三島市民に還元できるような形で招待券を配っているのを、ちょっと心ない方がいて、市外の方に売ってしまっているということがあったので、今は、厳密に身分証明書を見せてくれとまではやってないが、一声かけて、その辺の不正利用を防ぐような形でやっている。それについては、佐野美術館の受付の方も嫌な気分をされている方もいるかと思うので、三島市民の方が気持ちよく佐野美術館を利用できるような方法はないか市内でも検討している。いいアイデアがあったら、ぜひ皆様の方からもご意見をいただけたらと思う。

委員：昔は自分のところで4枚全部は使えず、3枚余るので、もったいないから、他の親戚が来た時に渡せば、その人たちが佐野美術館に来るというような循環もあったが、メルカリなどのおかげで、今ちょっと根本に返って揉めているところがある。三島市からの助成で、各家庭に4枚の無料券が佐野美術館から出ているが、使用率は年間20%いかない。貰っている事業助成との絡みは置いといて、1家庭4枚というのは、三島市民は必ず1年に1回は佐野美術館に無料で足を運べる枚数で、そういう機会を提供しているのに、それが2割いかないぐらいで毎年推移しているということは、先ほどの三島の文化の環境に満足かどうかという話で、無関心層が20%いてというような、そういう数値のところにはやはり現れているのかなあと思う。チャンスがあるなら行ってみようとか、それぐらいのアプローチでも今後数字を伸ばしていけたらいいなと思うが、やはり、なかなか数字は伸びないというのが現状。

委員：次年度の計画を見直す時に、そういったサンプルを取って、分析したりするのが必要だと思う。例えば、県もいろんなタレントを使って事業をしているが、メルカリやヤフオクとかに、パンフレットとかが、本来の使い方ではない使い方をされたりする。JAとかも乃木坂を使ったりしているが、そういうものもメルカリに出たりする。何かちらしがあったりすると大量に持って行ってしまいう人もいたりして、難しい問題。きっかけを作って、さらに文化の方に目を向けてくれればと思うが、別の使い方をされたりする。そういう大きな課題があるということを、改めて認識しなければいけないと思う。

委員：今の関連になるが、日大、あるいは順天堂もそうだと思うが、国際関係学部の学生とか教職員が教職員証や学生証を見せれば、提携をしているので、本人と同行者2名まで無料で入れるようになっている。学生にも伝えてあるが、なかなかバイトや授業があつたりして、そんなにみんな行っている

って訳ではない。今聞いて、三島市民の意識調査は定期的にやっているが、三島にある大学の学生に三島市についてのイメージとか文化活動についてアンケートを取っても、面白いデータが出てくるのではないかと思った。あと、もう1点、先ほどの三島の文化的環境っていう点で、先ほど事務局から、鑑賞とか、文化財とかっていう要素が出てきたが、例えば、図書館とか、あるいは三島の夏祭りとかハロウィンのイベントとか、そういったことも、十分魅力的な文化的な要素だと思うが、もしかしたら、具体的なイメージが三島市民の方であまりできてないのかなって思う。私の地元は神奈川県横須賀市だが、横須賀市から三島市に移って、相当文化的な環境にあると感じている。何かそういう具体的なイメージがもうちょっと持てれば、また数字も変わってくるのではないかと感じている。

事務局：こういうアンケートは、聞き方によってかなり数字が左右されるところがあるので、次回の計画を作る際には、質問や聞き方については、具体的なイメージが湧くようなものを考えている。

委員：かといって、全部書く訳にもいかない。どうしても、「など」・「等」というふうに省略せざるをえない側面もあるが、今、委員が言われたように、具体的にイメージできるような、ちょっとした工夫があると、数字が上がる可能性は十分ある。

委員：今の美術館の話聞いていて思ったのが、「日常生活の中で文化が重要と考える人の割合」というのは、平成25年の7月と令和2年の5月に実施された「文化芸術に関する市民意識調査」の結果という形で数値が出ているが、これは何年ごとに1回とか、特に周期を決めて実施しているのか。

事務局：これは計画を作る際に、文化に関する意識調査をしているので、来年度、実施する予定。

委員：日常生活に文化が重要だと思っている方々は、昔もちょっと前も、まだまだ高い割合で、無関心に見えそうな人たちも、もしかして重要だと思っているのかなと思ったが、でも、実際にこういう方々が、出かける、文化芸術に触れる、体験する、何かの形で行動を起こすという時に、はっきりとしたイメージが湧かなかったり、ただ単に忙しいので気持ちが乗らないとかといったようなことがあるかと思うので、重要だと考えている人たちが、より軽やかに文化芸術に親しめるような流れや、その辺り、何かしら見つけられる方法があるといいなと思う。美術館の方は、うちの子どもが保育園でお邪魔したが、本人がまた行きたいと言っているなので、早速、券を使っていけるなって思った。やはり体験を経ることで、行動のハードルが下

がっていくということはあるので、こんな一体験だが、何かしら文化に触れるチャンスが増えるといいなと思う。

委員：今度は1番目の「子どもの文化芸術体験の充実が重要と考える人の割合」について、これも前も話が出ていたような気もするが、これが段トツに低い、「子どもに文化が大事か」って聞いたら、特に考えなくても「大事だよ」って言いそうな気がするが、「大事だよ」って答える人がこんなに少ないのはどういうことなのか。「子どもより大人だよ」っていう人が多いのか、「いや、子どもには文化じゃなくて、これだよ」っていうものが他にあるのか。「子どもの時から文化に触れるのが大事だよね」って、みんな普通に思いそうな気がするが、そうではないのは、何か書き方とかもあるのかも知れないが、何か他に大事だと思っていることがあるとか。もしあるなら教えてほしい。不思議に思ってしまう。

事務局：その当時の質問票がちょっと今手元にないから正確ではないが、市民意識調査に、昔は、真ん中に「どちらでもない」という項目があった。みんな、「どちらでもない」というところに集中して、多くなってしまうため、そこは止めて、例えば、「満足」というのと、「どちらかという満足」、あとは「どちらかという不満」、「不満」、あとは「分からない」、その真ん中の部分を令和3年か4年頃の改善で抜かしたってこともあり、両極端に意見が分かれるようになった。それ以前の事なので、多分、「どちらでもない」という回答が多かったのではないかな。

委員：やはり「種をまこう」のところは、特に子どもに向けての事業が多いようにも思ったし、そういう意味で、計画の中に入ってやっているので、皆さんが大事だと思って、種をまくってという方向になると、よりいいのかなと思う。

事務局：統一性がなくなるので、毎回毎回、聞き方を変えるわけにはいかない。他の聞き方や過去の聞き方と整合性を取りながら、やってきたい。

委員：聞き方もあるかもしれない。文化っていう言葉に、「じゃあ、文化の中に映画が入るの」とか、「ゲームも入るの」とか、「落語も入るの」とかっていうふうには、うまくイメージできなくて、文化っていうと、すごく崇高なものみたいな、そういう捉え方を、もしかしたらするのではないかなというのを、実は、同じ課題が、静岡市の文化振興計画を作っていく時に、やはりデータを改訂する時に出た。何かその辺の聞き方、表記の仕方、それが反映されてしまっているのかも知れない。

事務局：聞くときも、「特に文化とはこんなことを指します」みたいな一文があっ

た方がいい。

事務局：欄外にちょっと補足を入れて置くだけでもいい。確か、静岡市はそんなふうにしたような気がする。

委員：この意向調査というのは確か2,000人を抽出してやっている。団体調査もあり、我々も団体として回答した経験があるが、文化団体のところに来て、これを質問してどうなんなんだろうかということが1つある。それからもう1つ、計画のところにも出ているが、どういう人が回答しているのかっていう。この調査が来て、高齢の男性の人に、「子どもにどうですか」みたいな質問をして、「いないから関係ない」というような、そういうことだと思ふ。だから、これは質問の仕方の問題だが、それを全部網羅するのは難しく、どうしてもそういうふうな補足説明をしなければならないようなデータになっている。ずっとこういう形で出ているので、上がったたり下がったりすると、「どうしてなのか」という質問が出て、担当の方で、「そういうところに嵌ってない人たちもいるのではないか」みたいな話になってしまう。それから、文化に触れるっていうことで言うと、よく思うが、10万人都市で、佐野美術館みたいな美術館を持って、それから駅を降りるとすぐに楽寿園や楽寿館があって、それに、川のせせらぎが聞こえてとか、皆さんいろいろ思って来てくれている。例えば、文化に触れたことがあるかっていうことで言うと、さっきちょっと出たが、夜5月ごろから、夜、町を歩くと、しゃぎりの音が聞こえてくるが、アンケートに答えている人は、文化だなんて思っていないと思うが、それも立派な文化だと思う。しゃぎりも三嶋大祭りも伝統文化だが、あって当然だと思っているから、それを文化だと思っていない。さっき先生が言われたみたいに、文化というところもちょっと構えるところもあるので、補足説明した方がいい。補足っていうのはやっぱり大事。三嶋夏祭りを1度も見たことがないって言う人はいないと思うが。そこら辺の、あって当たり前なようなところを再確認するのはこういうアンケートでいいと思う。

委員：漠然と思い出したが、文化っていうことの表記を細かく、注意書きか何かで入れた結果、静岡市では、数字が、確か30%ぐらい上がったような気がする。それだけ文化というものに対して、皆さん、漠然と捉え過ぎているというか、うまく理解できないみたいなところがあるのではないかと思う。今言われたように、地域のしゃぎりや祭りは、これも立派な、いわゆる文化。県のアーツカウンシルしずおかが、文化として、しゃぎりをずっとずっと応援している。祭り自体はハレだが、むしろ、三嶋はそういうものが

日常的に溢れているので、もしかしたら、それを文化として捉えていない方もいるような気がする。補足はいずれにしても必要だと思う。

委員：今思ったのは、皆様の意見を拝聴して、やはり、数値目標の2番と1番の乖離、あるいは、2番と3番の乖離が著し過ぎて、どこに原因があるのか、漠然とし過ぎて分からない。会議の中で議論を深めていく上で、ちょっと支障になるのではないかと思う。まず質問をさせてもらいたいのは、このアンケートを取るにあたり、答えてくれる方の年齢とか、あるいは、家族がいるのかとか、そういうことを書く場所はあるのか。それによって、例えば、1番の「子どもの文化芸術体験の充実が重要と考える人」ってところで、実際に子育てをされている世代の方の割合と、子どもを育てていない方、あるいはシニア世代の方、あるいはお子さん自身で、このパーセンテージが違っているのであれば、その低いパーセンテージの世代に、私は子どもの頃の芸術体験はとても重要だと思っているので、重要だと伝える施策の提案、あるいは子どもの世代が逆に必要でないと思っているのであれば、それはなぜですかということを知りたい。世代ごとの違いがあるのか、そうではなく、漫然とこういう数字なのかによって、ちょっとアクションが変わってくると思う。

事務局：市民意識調査だと、年代と地域と性別は取っているが、その答える方の世帯にお子さんがあるか、いないかといったような項目はない。この調査は市政全般について聞いていて、ある1つのところだけ深掘りするというのは、質問が多いアンケートなので、ちょっと取ってない。

今回のこの計画を作るときのアンケートについては分からないが、一般的なものと多分性別とか年齢とかを書いてもらうかもしれないが、やはり深掘りをするってことはなく、項目ごとに単純に集計するだけなので、1枚1枚見て、こちらの方には子どもがいるとかいないとか、年齢はとかいうのは、そこまでは一般的にはちょっとできていない。

もし、そこまでやるとすると、令和8年度に新しくする文化振興基本計画を策定するため、令和7年度に検討するが、その資料とするために、来年度、予算を取って委託料として、文化の関係だけのアンケートを行う。それをやれば、市民意識調査とは別の対象者になる。ただ予算次第。

あと、アンケートを実施する際は、電算センターというところに依頼して、アットランダムに、その中の世代から、何人抽出していただきっていうのをやって、多分、数字的にアンケートの回答率がこれぐらいだったらいいよっていう人数を選んでやっていると思うが、多分そこまで。例えば子ど

もが何人いますかっていう複雑な項目を踏まえて、抽出できるかどうかっていうのは、担当課と協議する必要がある。

委員：よく電話で意識調査を聞かれる時に、年齢や年代を聞かれるので、そういうのがあるといいと思う。

事務局：これはクロス集計をしているので、年代別にどういう回答が多いっていうのは出ている。

委員：そこまで分かれば、大体分かるのでは。

委員：この意識調査って標準調査。統計学上で2,000人、年齢構成も含めて取ればいいという標準調査だと思うので、文化振興基本計画を作るということになった時に、三島は文化振興基本計画の展望をどうするかっていうところを踏まえて、それなりの調査をしないと、きっと私たちが言うようなことはなかなか出てこない。だから、この意識調査ではなくて、文化に対する調査を再度するかどうかということと、それから、子どもの文化芸術体験とか文化的環境とかっていう言葉、多分、ここにいる人たちは分かっていると思うが、市民には多分理解ができないだろうと思う。だから、その辺も含めて、調査をするべきかどうかっていうところの検討が必要。

事務局：静岡市が文化振興計画を作るにあたって、それだけのアンケートをやっているかどうかご存じですか。

委員：団体等には取ったような気がする。

事務局：当市の計画を策定する際も、市民意識調査とは別に取っている。ただ、委員が言ったように、無作為抽出でやっているもので、例えば、ターゲットを絞って、子育てをされている世代の方に対して集中してやるとかっていうようなものではないので、あくまでも18歳以上の世代の中から、多分2,000人を抽出して、アンケートを回収することになる。次回、アンケートをする予定だが、その中で、ターゲットを絞ってやるのかやらないのかっていう話になってくるかと思うが、ただ、そうすると、また今度、数字が違ってくるので、統計的な継続性という点で、なかなか厳しいので、そこが課題になってくる。

委員：現状のこれを変えようという話ではない。以前、文化を育てるために何が問題なのかという話し合いに加わっていたが、全く意識調査に加えていなかった時に比べれば、数字が出てきて、この数字の乖離は何なんだっていうような議論になってきているので、すごくプラスになっている。さらに積極的に文化を育てるという方向になった時に、次の段階の、令和8年度以降のところを、私たちの中で何が提案できるかといったところも考えて

いくのがいいかなと思って、発言させてもらった。

委員：今聞いていて少し思ったのは、例えば子どもがいる人たちは「子どもの文化は大事だよ」って言うけど、年を取った人は「もう関係ないよ」って言っているかどうか分からないが、本当はそうじゃないまちなしていかないと、大人とか年寄りの人もみんな子ども文化を支えていこうっていう方向を目指さないといけないのではないかなと思ったので、もし、今後調査をして、年配の人が「関係ないよ」と思っているんだとしたら、「関係なくない」っていうふうに思えるような事業をしていくことも必要なのではないかなと思う。子どもがいる、いない、子育てをしている、していないにかかわらず、みんながそう思えるようになるといいと思った。

事務局：意見を伺っていて、本当に三島の老若男女すべての方が、「文化は大事だよ」って、自分に子どもがいる、いないにかかわらず、そういうふうに思ってもらえるような施策を、これから打ち出していかねばいけないと思う。

委員：具体的にどうこうって話ではないが、ネガティブな方の話も聞きたい。「なぜ来ないのか」、「なぜ行かないのか」といった理由。確か前の大きなアンケートでは取っていたような気もするが、例えば、「時間がない」、「お金がない」、「何がない」、「できないって」いう、その理由が知りたい。文化に触れている人はもう来るので、もう分かっているって言うのも変だが、分かっている。残りの8割の人とか6割の人が、なぜ、文化に触れたくないのか、それを大事と思わない理由。今ちょっと、委員が言われたが、「関係ないよ」ということなのか、もっと切実に、「だって時間がないよ」とか、そういうことって、何かがベースがないと、施策を考える時に、いつも会議をして、数値だけはあるけど、なかなかそこに行かないのに、数字だけ上げるとかいうのは無理だと思うので、もうちょっとその辺りを今後は考えないと駄目かなと思う。

委員：今、ちょっと委員のお話を聞いて思ったが、ネガティブな情報として、私の子どもは、今、大学2年生だが、中高生だった時、文化部は吹奏楽部しかなかった。前にもちょっと話したかも知れないが、運動部に入ると「内申が良くなるので、運動部に入りましょう」という指導があるが、それも、子どもに文化は必要ないっていう一因になっていないかと、危惧している。文化と言って、ざっくり、子どもの教育場面では、美術部、音楽部くらい。美術を取るか、音楽を取るかっていう選択も中学校の時はあったが、今あるのかちょっと分からない。本当に文化部が全くないと言っても

過言ではない状態なので、その辺はどう考えているのか。

事務局：今ですね、学校教育課の方で、部活の在り方に関する検討会があって、子どもも、文化振興の担当なので呼ばれるが、委員が言われるように、話題の中心は体育部で文化部の話は全然出てこなくて、指導員の話も、スポーツ関係の指導員はどう雇ったらいいかっていう話は出てきたが、文化系の話が出てこないなので、質問したら、「すみません、聞くのを忘れました」って言われるような状況。先日、美術展があった時、書道の審査員をされている方が言われたのが、今回ちょっと書道の応募件数が少なかったんですが、「中学などで部活がない」と。「中学とかでやっている、その後は成長があるので、そういったのが何かできないかというのがありますが、子どもの数も少なくなってきていて、単体の学校だけでは難しいので、例えば、学校間で連携して、公共施設で指導したりすることがあった方が、文化振興を図る上でいいのではないか」というご意見をいただいた。その方向性というのは言われるとおりでと思っているので、部活動の在り方に関する検討会で、そういった方向の意見等は申し上げていければと考えている。

委員：日本って部活動って学校ベースなので全部あるが、フランスには部活がない。けれども、地域にもものすごくたくさんサークルがあって、そこに親が子どもをバンバン入れて行くっていうベースがある。スポーツも文化も全部ごちゃごちゃで。だから、地域の人に指導してもらってという話は、それこそ、学校が文化部を持ってないのなら、地域の方で文化部をバンバン作ったらいいと思う。

事務局：部活動在り方検討会で話を聞いていると、指導者の方とか親御さんの考えもあったりして、なかなか難しい。

委員：SPACの宮城さんなんかは、「そういうスタンスがあれば、どんどん自分たちの役者を使いたい」というふうに言っているので、そういう文化団体というのは、多分、たくさんあるのではないかと思う。あと、そういうノウハウを持った人とかを掘り起こして、利用して、地域に三島部活動みたいな文化部活動もいっぱい作る。学校は大変だと思うので、「これから部活動を復活させろ」と言ったら、「何に言ってんだ」と感じる。

会長：今、いわゆる地域部活っていうのはスポーツ中心で行われているので、ちょっと文化の方には手薄くなっていて、なかなかフランスのようにはずばっとはいかないが、そこで実績を作るといふふうに国の方も思っている。その文化部として、積極的に動こうとしているのは、掛川。掛川市の地域部活は、そういうところまでこう目を配って、むしろ市民の方がそういう

団体を作って、働きかけたりしている。ちょっと掛川市を調べてもらおうと、地域部活のことが出てきたり、地域部活がアーツカウンセルしずおかのプログラムの中に一緒に入っていたりとかして、そういう場を整えつつあって、それを全国に発信しようとしている。そんな動きもある。

委員：某習い事教室では、何で教室に来なくなったのか、何で来ないのかっていう調査を1年かけて数百人に行った。その結果、今来ている人をファンにして、もう1個何か教室を受けようとか、もうちょっと何かしようっていう気持ちにさせるようにしている。その1人のファンには、いっぱい友達がいる、家族がいる、影響力があるので、この人を絶対大事にするって方針に変えている。市の施策として、そんな極端なことできないかもしれないが、民間では、例えば、紙媒体で告知するときには、子ども向けのものを出して、「お孫さんに伝えて」とか言うようにして、ターゲットを明確にして、誰に伝えたいかというのを、発信するようにしている。もちろん、来ない人、関心がない人に対して何かしなければならぬという市の施策とか、方針とかいうのはもちろん理解するが、いつも広報だけで発信して、何かいつも同じことをやっていると思ってしまう。関心ある人に刺激を与えることで、本当に講演会に子どもを連れてくる人が増えた例があるので、そういうちょっと刺激的なことをやってはどうか。「そんなことをするんだってよ」とか、「今日、お母さんあれに行くんだってよ」とか、「えっ」って言うだけでも違ってくる。広報では伝えきれなかったかもしれないので、家庭の中で告知をしっかりとやらしてもらおうようにしている。参考までに。

委員：非常に参考になる、民間のノウハウだと思う。

(4) 絵本のまち三島推進事業について

資料(当日配布)に基づき事務局から説明をした後、次のような意見交換及び質疑応答がされた。

委員：羨ましい。絵本でこれだけPRできるなんて。前にもお話したと思うが6,000冊ぐらいの絵本を個人で持っていて、文化振興審議会よりもこっこの委員に入れてほしい。いろんな取り組みもされ始めて。そのマークは何か三島の水や水滴みたいなものをイメージしたのか。

事務局：デザインをしたのは小学6年生で、その方の原案をもとに宮西先生が調整したもの。その原案を作成した方によると、顔は三島のせせらぎを象徴し

た水、体は三島の名産品でもあるウナギをモチーフにして三島らしさを目指したということで、ポケットには絵本を忍ばせている。絵本らしさ、三島らしさが溢れるかわいいデザインということで、原作者の方からご提案いただいた。

委員：いいですね。羨ましい。最近はバッグを持ってくる人たちが結構いるが、そういうバッグがオリジナルでできるといいと思う。静岡市の図書館協議会の会長も長くやっていたが、芹沢銈介さんのそういうバッグを作ったらどうかという話になったが、著作権が下りなくて、クリアできなかった。せっかく、そういうものがあるので、なるべく多くの人に触れてもらうためのいろいろな方法があると思う。

事務局：著作権については大丈夫。

委員：先月、絵本作家の方と音楽と文芸・文化のコラボレーションを行った。宮西先生にもぜひお願いしたいと思うが、文化のまちづくり課に相談すればいいのか。

事務局：こちらのロゴマークについては三島市。宮西先生の作品については、宮西先生。

委員：何かそういう企画をした時に、ちらしなり告知に使えるのか。

事務局：どんなことに使ったのか把握したいので、申請して貰うことになっている。電子申請も可能。

委員：鳥取の水木しげる記念館は著作権フリーで、何かお土産物を作るのでも地元の人だったら著作権フリーになっているのではないか。そうすることで、より多くの発信材料になっていく。権利の問題やキャラクター管理の問題もあるので、ここまで自由に使えるなら、緩めにしておいた方がいい時代だという気がする。

事務局：絵本のまち三島の取り組みで、職員の中からまず気運を醸成していこうということで、2月から「教えてあなた推し絵本」という事業に取り組んでいる。職員からお勧めの絵本を紹介してもらって、それに関するエピソードを、毎週金曜日に職員専用のページに上げている。三島市長から始めて、本当に役職問わず、男女問わず、皆さんから上げてもらっているが、意外と若い男の子からの投稿が多くて、ちょっと驚きだったが、毎週楽しみにしているという声を聞くと、励みになる。こういう会議の場でも、アイスブレイク的なところで、「私の推し絵本はこれです」みたいな話が始めると、会議の場が和んだりするのかなと思う。この前の広報みしまにも、議員の推し絵本というのが出ていて、議員一人一人が、「私の絵本の推しはこれで

す」というのが短いコメントだったが載っていたが、載せることで、その議員との接点が生まれたり、人柄が自分が思っていたイメージと変わった、いろいろな人との繋がりが生まれきたり、なんていう効果もあるかと思うので、ぜひそんな取り組みを、広げていきたいと思っている。

委員：今お話があった推し絵本事業って面白そうだと思う。多分、市役所の中だけでやっているのを外に広げたら、市民も自分も推し絵本出したいとか、参画ができるところがあるのではないかと思う。これからの事業として、1つ考えてみてはどうかと思う。それと同時に、この事業の一覧を見ると、どちらかっていうと市民が受け手みたいな形で、読み聞かせしてもらおうとか、何かのお祭りをするから来てねっていう感じで、市民の参画が、ちょっと少ないかなって思う。私たちのところはアート団体なので、割とアーティストの付き合いが多いが、アーティストも絵本作りたいて言っている。絵本を作って、原画の絵本を学校の図書室に飾るようなことができたなら面白いとか。三島にも、地域でアート活動をしている人が結構たくさんいるので、そういう人たちが参画できるとか、絵本作家ではないアーティストでも絵本は作りたいていう希望があるらしいので、絵本を作ってもらえるような事業ができるといいのではないか。もう来年度の予算は終わったのかも知れないが。

団体の宣伝にもなるが、行政や団体、企業が競争して下水道をPRしようっていうことで、三島の浄化センター内の道路に絵を描こうっていう事業を3年ぐらい続けている。今年はせっかく三島市が絵本のまちということをアピールしているので、浄化センターの絵も絵本仕立てにしようと考えている。できれば近い将来、それを絵本にしたり、あるいは浄化センターに社会科見学に来る小学生に冊子にして配りたいが、「お金がないね」っていうところで話が止まってしまっている。アーティストとか民間団体とかが参画できるような事業を考えてもらえると広がりが出てくるように感じる。

委員：絶対、SNSで発信したらいいと思う。インスタでもなんでもいいが、公式ってやって、絵本のまち三島ってやって、そこに推し絵本とかって書いて、ハッシュタグをすれば、もう早速、引っかかってくる。興味がある人はいると思うので、絶対、絶対、いいと思う。推し絵本って言って他のことは載せず、イベントもそこでどんどん発信すれば、絶対興味がある人は、全国から検索して、そのためにここにやってくる。委員がやる事業なんかも、全部みんなでツイート、リツイートとかで共有すれば、みんなで情報

発信できる。

事務局：まだホームページしか作っていない。

委員：SNSですね。間違いない。

委員：ホームページもここに載せて、飛べるようにしておいて、基本、毎日やれば、「もうすごい、三島」って絶対になると思う。「おじさんがいて、おばさんがいて、若い男の人がいて、めっちゃ面白いじゃん」って、絶対になってくると思う。顔出しNGの人は、それはそれでやって。ただ、著作権の関係で、本自体をちゃんと載せていいかはちょっと微妙。

委員：本の表紙も著作権がかかってしまう。ただ、著作権がかかからないように、版元がこれならOKですよって許可を出しているウェブサイトがある。そこに絵本もそこそこ載っていたような気がする。

委員：それも話題にすると面白い。載せられないので自分で書いたと言って、題を打ってハッシュタグをすると、その本が見付けられるようにしておけば、それはそれで、実物を見に行けるし、逆にその絵本の名前を書いていることで、他のところで絵本の名前を検索した人がそのサイトに見に来る。何だろうって言って。そういう公共に知られているものを利用すれば、みんなが訪れてくれるサイトになっていく。

委員：次の予算では、着ぐるみとかアニメーションで動くようにして、この人が喋るかどうかは分からないが、何かこう案内したりして、展開していくといいと思う。

事務局：もともとはキャラクターではなく、ロゴということで、何かマークみたいなものを募集していた。

委員：キャラクターになってますね。

事務局：ロゴなので、名前もない。

委員：名前募集もやると。

事務局：先ほども言ったが、あくまでロゴマークって形で募集して、実は表彰式を今度の30日にやるが、他に応募されてきた方には、大分ロゴマークっぽく応募されてきた方もいて、その方々は落ちているので、今の段階だと、キャラクターっていうのを前面に出しにくい。マークって言ったのに、キャラクターではないかということになってしまう。事務局側としては、あくまで、これはロゴマークっていう仕立てでいるので、その段階で名前を付けてしまうと、「キャラクターじゃないか」と言われるのを危惧しているので、少し余熱が冷めてからかなと思う。実は、応募された方は名前を付けていて、公式には言えないが、エミーちゃんと呼んでいる。絵本の「エ」

と三島の「ミ」なので、すごく分かりやすい。だだ、表彰式が終わるまでは。ちょっとキャラクターって言われると元も子もないので。

委員：いやいや、「ロゴマークを集めたが、こうなったもんだから、これで行きます」って、市長に言ってもらったらどうか。

委員：大丈夫だと思う。あとは三嶋大社の中に絵本神社を作ってもらって。

委員：もうすごく広がる。「要らなくなった絵本ください」みたいなやつだって。うちでもそれをやった。

委員：古本がすごく集まって、結構管理が大変。

委員：中に個人情報を書いてあったりするので、気を付けて集めた方がいい。

事務局：来年度、「街なか絵本箱」という、商業施設とか公共施設に絵本箱を置いてもらう取り組みを行うが、絵本を買う金を自分たちが捻出するよりも、不要になったものを貰った方が再利用ということでもいいかなと思っている。幾つか注意事項があるということだが、あと、どんなことに気を付けたらいいのか。

委員：要らないおもちゃを集めて子どもたちが遊ぶイベントをした時に、絵本も集まったが、それを処分するにも、「何とかの何とか」って名前が書いてあったり、「何とかちゃんへ」って書いてあったりして、どこまでを個人情報として判断していいのか分からなかった。だから、その人たちのごみ捨て場みたいにならないように注意した方がいい。

委員：ちょっと、注意書きが必要かもしれない。名前が記載されてないものとか。だけど、絵本って、扉を開くと、結構、作家のサインとかがそこそこある。

委員：それはそれでよしとするとか決める必要がある。ぼろぼろでもこれいいなっていうものとか、いろいろあったので、集めるのなら気を付けた方がいい。

委員：特に大きな意見とかそういう話ではないが、うちの自治会は実は子ども会がなくなってしまったため、一部の方々がボランティアで、毎週土曜日の午前中に工作をやったり、絵画をやったり、折り紙をやったりする活動を行っている。大体1時間ぐらいの枠の中で、必ず一番初めに読み聞かせを元保育士の方々がして、最初は本当に絵本を持っていたが、ある時、何か大きな画用紙に絵が書いてあって、それが2枚重なっていたのが、今度は4枚重なって、どんどん大きくなって、子どもたちはもう吸い込まれるように見ている。この絵本のまちの活動がこうやって少しずつ拡大していく中で、そういう学校とか、図書館、ジンタ号とか基幹のところまで広がっていくと思うが、子ども会とか、そういうところにもコネクションを持って

いけると。将来的にいいのかなと思う。

委員：前半の皆さんの厳しい顔から、絵本の話題になったら、一気に笑顔が戻ってよかったなと思う。こういうアイデア会議みたいなのは、必要で、こういうところを出していくのはいいと思う。

3 事務局より

三島市文化振興審議会委員の任期が9月30日で満了するため、これまでの審議等に対してお礼。

4 閉会